

ドイツ研究滞在 2年間のその先に

藤原素子 (ミュンヘン工科大学 → 富山大学)

参考資料: Humboldt fellowship [公式HP]

<https://www.humboldt-foundation.de/en/apply/sponsorship-programmes/humboldt-research-fellowship>

MF, 山田雅俊 「フンボルト奨学金 応募のすすめ」, 素粒子論研究・電子版 Vol. 38 (2022) No. 2

https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~soken.editorial/sokendenshi/vol38/sokendenshi_2022_38_2.html

はじめまして

- 名前: 藤原 素子 (ふじわら・もとこ)
- 専門: 素粒子物理学、およびその宇宙論への応用
- 出身: 茨城県 水戸市
- 学術的な軌跡
 - 高校: 水戸一第一高等学校
 - 学部: 慶應義塾大学
 - 大学院: 名古屋大学
 - 研究員(国内): 東京大学
 - 研究員(海外): ミュンヘン工科大学
 - 助教: 富山大学
- ドイツ滞在歴: 約2年 (10.2022-11.2024)

マラソンコース(42.195 km)では
どこを走っている？




Today's Talk

■ドイツの奨学金：フンボルト奨学金のすすめ

- 世界的に認知された奨学制度、滞在後のキャリアアップにも繋がられる
- 滞在終了後も Alumni プログラムなどを通し、研究パートナーとしてドイツとの関係が生涯続く
- ドイツ語学校 + ドイツ周遊旅行 = ドイツ生活を市民としても満喫できる


■私の経験談：キャリアアップにどんどん挑戦しよう！

- フンボルト挑戦記
- 学内でもキャリアアップ！
- 日本の教員職への応募



ドイツの奨学金 フンボルト奨学金のすすめ

なぜいま、フンボルトの話？

- 疑問: 今ここにいる皆さんはすでに JSPS からサポートを受けている、なぜ他の奨学金の話をするの？
 - 答え: 特別研究員として滞在開始後も、任期延長の切り札として使える
滞在先で現地のフェローシップに受かる長所がたくさんある
今後キャリアアップをする中で、ドイツと研究交流を保つために非常に良い制度が揃っている
- 

フンボルト奨学金とは

ドイツに研究滞在するための奨学金制度

- フンボルト財団の主催する奨学金、研究滞在のための助成などが受けられる
- ドイツ国内のホスト研究者を指定して研究計画などを提出し応募、採択されれば最大2年間の研究助成が受けられる
- イメージとしては「ドイツ限定の海外学振のような立ち位置」？

フンボルトと特別研究員制度の違い

※ 参考: 特別研究員 滞在費@ドイツ 17,200円×30日=51.6万円

- 現地の通貨で滞在費が支給される、若手研究者に対しては**月額 2700 ユーロ** ≈ 44.6万円 (1ユーロ=165円で換算)
→ 為替相場に左右されることなく、安定した経済的支援が受けられる
- 滞在費とは別に**月額 500ユーロ (人文社会系) / 800ユーロ (自然科学系) の研究費**がつく
→ ヨーロッパ圏内の出張には事欠かない研究費がもらえる
- ヨーロッパ圏での知名度が圧倒的に高い
- 語学研修・ドイツ周遊旅行など、研究に加えてドイツ滞在を楽しむ独自のサポートもプログラムに取り込まれている
- 元奨学生用の研究助成プログラムが充実しており、滞後もドイツとの研究交流を続けることができる

奨学金は非課税のため、**手取り額**に相当
ただし保険は自分で入る必要あり(保険料、補助制度あり)

この研究補助金は、はじめホスト研究者に支給される
フェローからの要請で研究費として執行可能

フンボルト奨学金の特長 (1/2)

フンボルト奨学金の理念

Once a Humboldtian, always a Humboldtian

- ドイツで研究するために、生涯続くサポートが最大の魅力
- 研究プロジェクトではなく「人」を支援する奨学制度
- Alumni program : ドイツ国外から再び研究にくるための滞在費をサポート(~3ヶ月)
→ フェロー機関終了後も、ドイツでの研究拠点と密接な協力関係を築きやすい

What is important to us

If you would like to become a member of the Humboldt Family, only one thing counts: **your own excellent performance**. There are no quotas, neither for individual countries, nor for particular academic disciplines. Our selection committees comprise academics from all fields of specialisation and they make independent decisions, based solely on the applicant's academic record. We support people, not projects. After all, even in times of increasing teamwork, **it is the individual's ability and dedication that are decisive for academic success.**

フンボルト奨学金の特長 (2/2)

ドイツ生活のための手厚い支援

- **ドイツ語研修** : 語学学校に通いドイツ語を習得することができる (受講しない・2ヶ月・4ヶ月から選択可)
- **スタディ・ツアー** : ドイツ国内の都市を周遊し、ドイツの歴史・産業・政治・文化を学ぶことができる
- **研究者としてだけでなく、一市民としてもドイツ滞在を楽しめるようにサポートしてくれる**
(日々の暮らし・精神的な安定があって初めて、主目的の研究に最大限のパフォーマンスを発揮できる)

オーガニック農園でのピザ作り @Meeder



Matias Repetto Bonnpland ©

強制収容所の説明を受けるフンボルトティアーナ @Buchenwald



Matias Repetto Bonnpland ©

ドイツ首相府での集合写真 @Berlin



Matias Repetto Bonnpland ©

研究滞在助成の応募枠

	Postdoc	Experienced researcher
資格	博士取得後 4年以内	博士取得後 12年以内 すでに独立した研究職についている者
奨学金	2700ユーロ + 研究費 同行家族に対する支援あり	3200ユーロ + 研究費 同行家族に対する支援あり
滞在期間	6 - 24ヶ月 (最大3回まで分割可能、3年以内に遂行)	6 - 18ヶ月 (最大3回まで分割可能、3年以内に遂行)
推薦書(二通)への要請	- 指導教員 - 別の研究者(所属機関外からが望ましい)	- 重要な研究パートナー (出身国外からの推薦者が望ましい)

選考について

スケジュール・選考基準

- 応募はオンラインで完結しいつでも提出可能、3月・7月・11月に選考が行われ、直近の選考にかけられる
- 提出から査読を経て結果が通知されるまでは半年程度かかる
→ 滞在を始めた時期が決まっている場合、逆算して余裕を持った応募スケジュールを組むことをおすすめします
- 採択率は20-25%が目安 (cf. 日本の特別研究員と同等の採択率) ※ドイツの経済状況に強く依存

特別研究員として応募する場合の注意点

- 応募資格: 直近18ヶ月間において、12ヶ月以上ドイツ以外で生活していなければならない
→すでにドイツで滞在を始めた人は、**滞在開始日から6ヶ月を超過してしまうと応募資格を失ってしまう**
もし任期延長の交渉材料に使いたい場合、なるべく早く応募書類を準備することをお勧めします
- 「海外の優秀な研究者をドイツに呼び寄せる」というのがフンボルトの大目的の一つ
→すでにドイツで研究を開始している人に対しては、もしかしたら評価の目も厳しくなるかも?
任期延長に使っている研究者もたくさん知っているので杞憂かもしれない

もっと知りたい方は

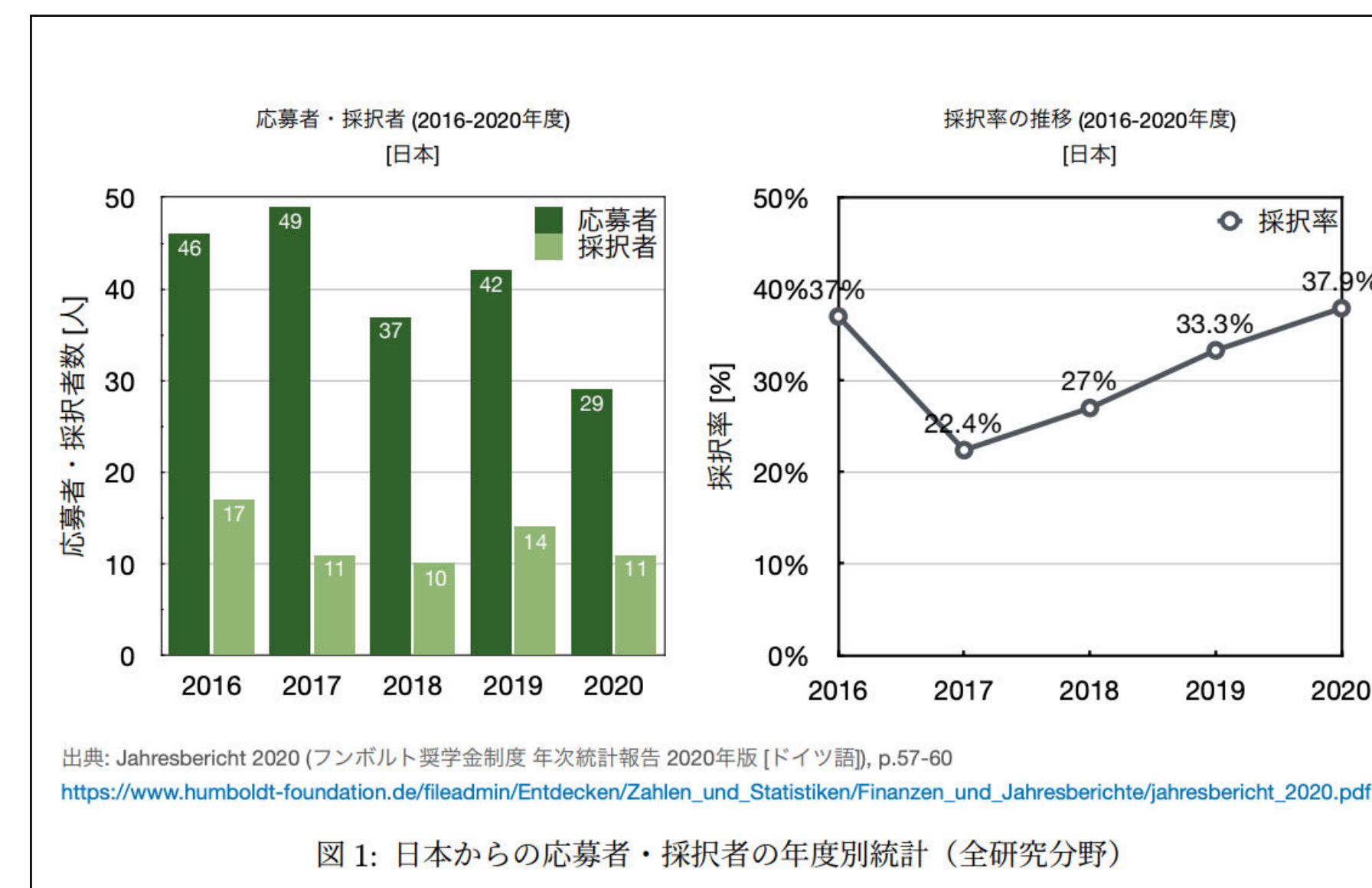
ドイツ研究留学説明会 [日本フンボルト協会HP: <https://avh-jp.com/>]

- 日本フンボルト協会 (日本人Humboldtianからなる同窓会組織) の主催で、説明会が毎年開催されている
- 応募に関する基本情報の説明会・フンボルト奨学生と交流できる専門別分科会・個別相談会など、豊富な企画あり

応募のすすめ

[\[https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~soken.editorial/sokendenshi/vol38/2/guide_humboldt_fellow.pdf\]](https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~soken.editorial/sokendenshi/vol38/2/guide_humboldt_fellow.pdf)

- フンボルト奨学制度の概要について紹介した日本語の資料
→ 応募の入口にしてもらうことを目指して作成
- 直近の日本からの応募者・採択者の推移
- 応募に関する基本情報
- 奨学生の行事 (ドイツ語研修、スタディ・ツアーなど)



特別研究員のその先に、ドイツのフェローシップ応募も選択肢に加えてみてはいかがでしょうか？



私のお話



ドイツでの研究滞在

ドイツに来た頃の私

まずは研究頑張るぞ！！！！

現地の人たちと論文バリバリ書くぞ！

とだけ思っていた

海外研究滞在、そんなに甘くない！

- 2年間なんてあっつっつという間！！！！

もし任期が2年しかないのなら、1年目終了したらすぐ公募に出さなくてはいけない

- 分野にもよるが、研究環境を変えたら軌道に乗るまでにかなり時間がかかる

特に1年目は、生活のセットアップやその国の生活に慣れることにかなり労力を要する

そんな中で、「1年で研究成果を形にしなければ」というプレッシャーと戦わなければいけない

- 日本の学会に参加するのが逆に難しくなる → 国内の研究者にはどんどん忘れられていく → 国内での地位も危くなりうる

スタート地点

「自分にはまだ早い」と思ってた

- 2022年春、ポスドクになったばかり
今のポジションの後のことを考えるのはまだ先！まして、公募に出すのはポスドクを2~3回やった後だと思っていた
- 研究者の先輩たちには「**出さないと受からない**」と言われ続ける
- 「雇ってもらえるかは自分ではなく公募先が決めること」頭ではわかるけど...いまいちピンときていなかった

はじめてのバッテリーボックス

- 自分にとって初めて「チャンスがあるかも」と思える国内の助教公募が出る
- 「とりあえず挑戦してみようかな」くらいのマインドで応募を決める
- 教員用の応募書類作成ははじめて → ポスドクの応募書類からどう発展させればいいのか悩む & 戸惑う
- 自分ドイツで研究を始めたばかり、「こちらの人との研究に集中したの方がいいのではないか？」と葛藤を抱える

今振り返ると、いきなり本番を迎えても絶対に対応できなかった

「その時」がくるまでに公募数をこなし経験を積んでいなかったら、本番でも力を発揮できず後悔しただろうと思う

転機: ミュンヘンの街角で

先輩の経験談

- 研究会でミュンヘンに来ていた日本人研究者の先輩と市内観光することに、先輩はこの春テニユア職に着任していた
- 「テニユア獲得はとても長い道のりだった」と話す先輩、出しても出しても梨の礫というのは当たり前だそう
- 実際に提出した応募書類をいただくとともに、応募書類を執筆する上でのありがたい助言をいただいた
「自分にしかできない物理」や「将来の研究ビジョン」が説得力を持って語られている書類、素敵で印象的だった
- 「こんな書類、今の自分に書けない…」まずは研究方針から見直さなければいけないのではないかと悩む
そのためにも **「いま、ありったけの応募書類を書く」ことが第一歩になるのではないかと**公募に挑戦することに

研究費の未来

- ドイツのある研究費の延長審査が行われる、現在この研究費で雇用される私もディフェンスに参加することに
- 「研究費で雇われた研究者の何割がアカデミアに残っているか、何割がジョブを取ったか」という情報が
成果実績として具体的な数字を出しアピールされていた
→ **研究費で雇われた私の進路は自分だけのものではなく、今後の後輩たちの研究機会に大きく影響する**と気づく

努力1: 奨学金に応募 → 不採択

フンボルト奨学金

公式HP : <https://www.humboldt-foundation.de/en/apply/sponsorship-programmes/humboldt-research-fellowship>

応募のすすめ : https://www2.yukawa.kyoto-u.ac.jp/~soken.editorial/sokendenshi/vol38/2/guide_humboldt_fellow.pdf

- 外国人がドイツで研究滞在するための奨学制度、ホスト研究機関を指定してポスドクと同等の待遇で2年間滞在可能
- 私はTUMにポスドクとしてオファーをもらっていたが「採択されれば任期を2年延長できる」とボスに勧められた
- ヨーロッパで広く認知されている奨学制度、採択されれば今後チャンスが大きく広がると思った
- ドイツの研究機関に雇われている場合、着任後の半年間だけチャンスがあった

挑戦と反省

- 着任後バタバタし、書類提出が応募資格ギリギリに... → ボスと連携してもっと余裕を持って提出すればよかった
- 研究軸が定まっておらず、書類ではできそうなことを総花的に書いていた → 全体のストーリーが説得力がなかった
- 当時はホストであるボスとの共著論文が一つもなかった → 実際にホストと質の高い研究ができるか具体的根拠に欠けていた

結果：不採択

フンボルト奨学制度の理念に惚れ込んでいただけに、落ちたのがとてもショックで辛かった

納得のいく書類が書けなかったことで、自分はなんのためにはるばるドイツまで研究滞在にきたのか見失いかけた

努力2: 学内昇進公募に挑戦 → 50%採択

当初の目的: TUMでの任期延長

公募情報: <https://collab.dvb.bayern/pages/viewpage.action?pageId=448371026>

- 2024年春、口約束では来年も雇ってもらえると言われていたが、グループの資金調達は不透明な状況、ちょっと怖い
- 「ファカルティに応募中のポスドクを対象とした任期延長公募に出してみないか？」とTUMのボスに勧められる
→ 自力で任期を延長できる最後の機会、背水の陣で挑戦を決めた

分岐点: 先輩研究者による書類へのフィードバック

- 某先輩研究者(人事経験者)に書類を添削・推敲していただいた
→ 「書類が公募の趣旨に沿って書かれていない」と指摘してもらおう
 - なぜ内部昇進が必要か？なぜ他ではなくTUMに居続けたいのか？
 - 他のポジションに採択される前提の間接ぎのポジションの公募 → 今後の具体的な応募プランは？
 - 公募された期間に相応しい計画か？(私は一年間の公募に対して三年分の計画を提出していた....)
- 最終候補者の二人に残り、50%ずつ採択してもらおう → ボスが残り半分を払うことに合意してくれ、任期延長が叶う

今までの公募では、一度書いた書類を使い回したりしていた → 各応募の趣旨を理解しそれに答えていなかったと気づく
ドイツで初めて獲得した競争的資金、素直に嬉しかったし少し自信がついた

■ 努力3: 国内公募への挑戦に次ぐ挑戦

続けた努力

- ドイツで研究を続ける傍ら、出せる国内ポジションには全て応募し続ける、そして落ち続ける
- 公募挑戦中に積み上げてきた業績を反映させることで、公募書類のマイナーチェンジを続けた
→ 更新を続ける中で、だんだん説得力のある書類を書けるようになってきたと思う
例: 私はXXXという問題意識を持ち、YYYという成果を出してきた。着任後は、今までの経験を活かしZZZに貢献したい
- トークの機会があったらなるべく現地に出張し、自分のことを知ってもらうために直接話に行った
- 研究だけではなく、教育歴・アウトリーチ活動・研究会運営などの業績紹介を拡充していった

結果

- 応募を続ける中で、富山大学の助教に採用してもらう (2024年12月着任)
- 任期5年間、定年まで再任可能のポジション → 研究を続ける上で、**長期的な拠点を持つことができた**

振り返ると一番大事だったのは「**公募に出し続けたこと**」だったと思う

正直な胸の内

ここでもまだ、何かできたかも 50%

- 学内昇進枠に採択されたことにより、TUMでの任期は 2025年9月まで延長されていた
- ヨーロッパ研究者とのプロジェクトも立ち上がり、ここからさらに頑張っていこうと思っていた矢先の滞在終了
- やっとなれてきたドイツ生活、「去年みたお祭りの景色が最後だったんだな」と思うと素直に寂しかった
- でも未来のことは誰にもわからない、今の自分にできることは、与えられたチャンスを最大限生かすことだけ

ほっとする気持ち 50%

- 異国で一人奮闘する中で、研究現場でも生活面でも、数々の修羅場を潜り抜けてきた
- お互いの文化の違いだと頭で分かりながらも、研究・生活現場で違和感ややりにくさを感じていた
- 特に初年度は精神的・身体的に相当疲弊し、正直研究どころではなかった
- 社会保障や医療の享受など、気軽にできるのが自国で研究する最大のメリットだと痛感していた

この白黒つかないグレーな気持ちを素直に認めて、また次に進んで行こうと思う

着任してみても

自分の本当にやりたかったこと

- 自分は元々地方の出身、地元には大手予備校がなく、学校の先生に補講をしてもらうなどして受験勉強していた
幼いながら、都市部と地方の教育格差を感じ問題意識を持っていた
→ 研究者としてキャリアを積む中で、「いつか日本の地方高等教育に貢献したい」と思うように
- 着任した富山大学は、いわゆる地方大学 規模もそんなに大きくない
それでも創意工夫次第で研究・教育へ貢献できる可能性は無限大、挑戦的な分だけやりがいも大きいと感じる

日本に着任して良かったこと

- 講座制の意外と良いところ？
メンターとして教授・准教授の助言を受けながら研究室運営を学び実践できる (本当に日々学ぶことしかない)
- 研究会の企画・運営など圧倒的にやりやすい 外国人の立場で貢献しようとするといろんなところにハードルがあるもの
こうして経験を積んでいった経験を元に、海外のキャリアアップに再挑戦することも可能

元々は海外キャリアにこだわっていたが「自分のやりたいことはすべて日本でできたんだ」と気づく
ドイツ研究滞在・日本の助教職着任 → 自分の理想の研究環境が立体的に見えてきた

Visit us! (U. Toyama, Theory Group)

Topic: Particle Cosmology

- Baryon asymmetry
- Neutrino
- Dark Matter
- Higgs Physics
- Phase transition
- Gravitational wave ... (See our Web site for more info)

If you stay at the dormitory in U. Toyama, you can stay 5 days within travel support per day (~10,000 yen)

Food in Toyama is AMAZING 🍣🍤🦀🍷🍶🍚🍵

**Giving seminar / Hosting JSPS fellow / Visiting student
You are always welcome!!!**



これからも、キャリアの話をしていこう

今回選ばれた自分に与えられた使命

- ドイツでの研究機会に恵まれ、先を歩く研究者にサポートいただき、自分は幸運にも次のステップに進めた
- これからの私の役割は、このバトンを次の世代につなぐこと
- これからも私の公募挑戦はまだまだ続く、その度に自分のペースで一つずつステップアップしていきたい

おわりに: 「出さなければ受からない」の真意

- 公募挑戦の一連のプロセス:
「自分に足りないものと対峙させられる → 創意工夫を迫られ実行する → 研究者としてさらに成長する糧になる」
→ この繰り返しこそが、自分が求める場所・自分を求めてくれる場所に連れていってくれるのではないかな?
- 「出さなければ(そういう好循環が始まらず)受からない」、金言の本当の意味を身をもって実感

皆様のドイツ研究滞在が実り多いものとなりますように
いま踏み出した小さな一歩は、その先の「あなたの理想郷」への大きな一歩だと思います